2017 年度　センター試験　生物（本試験）　分 析

全体概況

試験時間　60 分

大問数・解答数	大問数：7 題（第 6・7 問から 1 題選択）解答数：34 問または 35 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化　○ やや難化　○変化なし　● やや易化　○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加　● 変化なし　○ 減少
出題分野の変化	○ あり　● なし
出題形式の変化	○ あり　● なし
新傾向の問題	○ あり　● なし

総評

昨年よりも問題の構造がシンプルで、複雑な考察を要する問題は見られなかった。計算問題も難易度が低いものが 1 問出題されているのみであった。さらに、代謝（呼吸や光合成）の問題が必答問題としては出題されなかったこと、化学反応の詳細を問うような問題が出題されなかったことを勘案すると、全体として昨年よりやや易しくなったと言えるだろう。なお、生物基礎の範囲からの出題は、関連事項がいくつか問われているのみであった。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	A:タンパク質 B:遺伝子の発現	18 点	タンパク質や調節遺伝子に関する基礎的な内容の問題であった。教科書の内容を理解していれば解ける問題であった。
第 2 問	A:動物の発生 B:植物の生殖	18 点	問 2 は誘導と反応能に関する比較的易しい考察問題であった。問 4 は被子植物の配偶子形成過程で見られる、細胞や核の核相についての知識が必要であった。
第 3 問	A:神経系 B:植物の環境応答	18 点	Aについては、神経系の基本的な内容が問われていた。Bについては、光発芽種子についてのやや詳細な知識が必要であった。
第 4 問	A:個体群と生物群集 B:個体群と生物群集	18 点	AもBも考察問題が出題されたが、示されている資料がシンプルであり、選択肢も紛らわしいものが少ないので、解きやすかった。
第 5 問	A:進化 B:進化	18 点	問 2 は一見すると複雑な問題に見えるのだが、5 種類の生物の類縁関係だけ考えればよいので、実は解きやすい問題であった。問 4 はハーディ・ワインベルグの法則が適用できるとは書かれていないため、公式に当てはめようとすると解答を得られなくなる。
第 6 問 選択	遺伝子・細胞小器官・酵素	10 点	問 2 では、カタラーゼを含む細胞小器官について出題されているが、その知識がなくとも問題文を読み解くことで解答を得ることができる。
第 7 問 選択	系統・動物の行動	10 点	分類や動物の行動についての基本的な知識が問われていた。

Copyright (C) 2017 Johnan Prep School